

文化財保存と活用に関する課題～新聞社等が共催する特別展の現場から

2017 年 7 月 13 日 原田 真由美(読売新聞東京本社 事業局次長兼文化事業部長)

◆文化財活用の専門的人材の育成

・“オリジナル”にふれることの大切さ

高精度のレプリカによって文化財に親しみ学ぶ機会を拡げつつ、
世界に一つしかないオリジナル作品へのリスペクト～畏敬・憧憬～を育む
よう学校教育プログラムに美術館・博物館鑑賞の組み込みを。

・プロの教育普及専門スタッフの養成・シニア人材活用

優れた語り部（ストーリーテラー）のもとで鑑賞することで、作品とそれを取り巻く歴史・人物などへの理解関心が深まる。東京国立博物館の「ボランティア室」のように、ボランティアに対して定期的に講習を行い、鑑賞現場に配置するといった動きが拡がれば望ましい。個々の館でこうした対応を取ることは予算・人員配置的に難しいと思われるので、鑑賞ガイドスタッフを登録し博物館・美術館に派遣するシステムを設けられないか。将来的には、無償ボランティアだけでなく、プロ（有償）スタッフとして美術館博物館で一定のトレーニング講習を施し試験をクリアした人材、多言語対応人材の育成が、質を維持するために肝要と考える。文化芸術を通して社会参加を望む高齢シニアが活躍する場にもなるのではないか。

◆文化芸術への再投資とインフラ整備

・文化財保存・購入のためのクラウド・ファンディングを。少額でも購入に関わることで“私の、みんなの、文化財”意識と誇りを育む。

◆文化財を経済・観光資源として活用する際の課題

・展覧会運営面では、多言語対応、夜間割引、夜間延長など対応検討が急がれる件について、実施前のマーケティング、周知広報、実施後の検証・評価～さらなる改善のプロセスが不可欠。費用を国（または独法）でも予算化を。

◆国宝・重要文化財の公開に関する取扱い要項（平成 8 年）について

・指定品の出陳の可否、展示許可期間のより明快なガイドラインを。